

「超高速ネットワークを利用したアジア遠隔医療プロジェクト」TEMDEC (Telemedicine Development Center of Asia)活動報告：第17巻

<https://doi.org/10.15017/4475399>

出版情報：「超高速ネットワークを利用したアジア遠隔医療プロジェクト」 TEMDEC活動報告. 17, 2021-03. TENDEC Office
バージョン：
権利関係：

1. はじめに

2020年がこのような年になろうとは、1年前の報告書を書く時には予想さえしなかったことです。新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい人々の生活スタイルを一変させましたが、人の移動が国内外で厳しく制限される中、私たちが推進する遠隔医療の分野でも大きな変化が次々に起こりました。

まずオンライン会議の急増です。病院外とのコミュニケーションは元より、病院内での会議や打合せさえビデオ会議で行われるまでになり、これまでは特別だったビデオ会議は完全に日常的なものとなりました。様々なシステムに対応するための技術的支援は、セミナーや講習会、学生講義や学位審査などあらゆる分野に及びました。特に春先から夏にかけて予定されていた研究会や学会は急遽現地開催からオンライン開催へ変更せざるを得ず、限られた時間の中で不慣れな対応を強いられるという大変な状況でした。

海外との人材交流も完全に閉ざされる中、ワークショップなどの現地開催は次々に中止され、アジア太平洋学術ネットワーク会議、アジア遠隔医療シンポジウム、各国主催セミナーなど我々の関連活動もすべてモニター越しでの発表・討論の形となってしまいました。

ただこのような不測の事態の中で改めて再認識されたことは、これまでの直接的な触れ合いがいかに尊いものであったかということと共に、ビデオ会議の有用性・効率性・経済性が挙げられます。これまではそのメリットには気づきつつもなかなか実社会には取り入れられなかった状況が、図らずも新型コロナウイルスの影響により大きく変わることになりました。人々は直接会えることの意味や楽しさを痛感したと同時にオンラインコミュニケーションの便利さに触れ、恐らく新型コロナウイルスの終息以降もオンラインでの交流はこれまでとは比較にならないレベルで使用され続けられると思われまます。

九州大学病院の遠隔医療活動の歴史は約20年前に遡ります。ワールドカップの日韓共同開催、人と人の繋がり、医療の進化や技術の進歩など様々な偶然が重なり、この活動をアジアのみならず世界でリードするほどに成長させることができました。ただ時代は大きな転換期の中にあります。これまでとは異なるニーズや枠組みの中での対応が求められます。私のアジア遠隔医療開発センター長としての役割は今回で最後となりますが、この時期に次の世代へ引き継ぐことは図らずも良いタイミングであるように感じています。これまでお世話になった皆様に心から御礼を申し上げますと共に、今後とも当センターへのご支援をよろしくお願い致します。

令和3年3月
九州大学病院国際医療部 アジア遠隔医療開発センター センター長

清水周次